

『2021 年度学生生活実態調査報告書』刊行にあたって

本書は、学生センターが実施している「学生生活実態調査」の2021年度報告書です。

昨年度、新型コロナウイルス感染症の拡大により、学生たちは一年間を通じてオンライン授業を中心とした生活を強いられることになりました。その影響が今年度に至っても残っていることは十分に予想される場所ですが、それを考える上でも、継続的に実施されてきた本調査は一定の有効性を持つのではないかと考えられます。

巻頭言には不似合いではありますが、試しに今年の2年生の置かれた状況を本調査の結果にもとづいて見てみたいと思います。

今年度は昨年度に比べ、対面での授業や課外活動が格段に増えました。今年度の1年生については、新しい生活の始まりとともに、「大学」という場、「大学生」という仲間に接することが一定程度できました。一方、今年の2年生の多くは、そういった経験がほとんどないまま上級生となってしまいました。これは1年生の時に様々な経験を積んだ3年生、4年生とも大きく異なっています。新生活の始まりから「失われた1年」を過ごさざるを得なかった2年生たちは、他の学年の学生に比べて深い孤立感に苛まれているのではないかと考えられます。そのことが個人的にずっと気になっていました。

そこでまず、Q37「サークル活動に参加していますか。」について見てみると、「参加している」は1年62.1%、2年46.0%、3年51.0%でした。2020年度の1年生（現在の2年生）については、「参加している」が28.8%でしたので、サークル参加者が20ポイント近く増えていることが分かります。ただ、コロナ以前と比べると、2018年度が1年76.0%、2年59.8%、3年53.2%、2019年度が1年69.9%、2年56.0%、3年50.1%と、学年が上がるごとに「参加している」が下がっていく傾向がみられましたが、今年度については2年生が3年生より5ポイントも低い状態にあります。また、2019年度以前の2年生と比べると10ポイント以上下がっていることが分かります。こういった数字からすると、自分が属するコミュニティを見つけられないまま3年生にならざるを得ない2年生が、まだまだたくさんいるのではないのでしょうか。

こういった傾向は、Q9-1「【悩み・不安のある（あった）方に伺います】どの問題についてですか。」の回答からもうかがえます。「悩み・不安」について、「友人関係」を選んだ人は、1年51.2%、2年55.7%、3年24.1%でした。同じ質問についてコロナ以前の回答結果を見てみると、2018年度は1年54.1%、2年43.4%、3年39.7%、2019年度は1年54.3%、2年44.0%、3年33.6%と、学年が上がるにしたがって下がっていく傾向にあることが分かります（2019年度までは「友人・異性関係」という選択肢でした）。一方、2021年度は2年生が最も高い数字を示しています。2020年度は1年67.4%、2年25.4%、3年20.3%でしたので、1年生の時から抱えていた「友達ができない」という悩みが、そのまま2年生になっても続いているように思われます。

その影響は健康面にも及んでいるようで、Q11「健康状態は、次のどれに該当しますか。」について「多少の不安がある」「健康とは言えない」を回答した人の合計は、1年18.4%、2年23.9%、3年21.4%でしたが、2018～2020年度では2年生より3年生の方が多い状態にあ

りました。2年生については、2018年度16.6%、2019年度16.7%、2020年度16.0%でしたので、今年度の2年生は例年より健康に不安を抱えている人が多いと考えられます。その症状については、Q11-1「【自覚症状のある方に伺います】どのような症状ですか。」に見えますが、2年生について顕著なのは「いらいら」(1年24.7%、2年36.3%、3年29.5%)、「無気力感」(1年51.9%、2年58.8%、3年52.3%)、「抑鬱感」(1年34.6%、2年50.0%、3年43.2%)でした。とくに「抑鬱感」の50.0%については、2018年度の30.0%、2019年の23.8%から20ポイント以上伸びていますが、それぞれの年度の1年生が30.2%、30.5%、3年生が37.2%、39.5%で5ポイント程度の伸びにとどまっているのに比べて、大幅な伸びを示しています。さらに2020年度の1年生は「いらいら」が30.8%、「無気力感」が53.7%、「抑鬱感」が42.1%でしたので、進級とともにこれらの症状を自覚している人が5ポイントほど増えていることが分かります。

以上、個人的な関心から気づいたことを記してみました。今年度に入り「失われた1年」を埋め合わせるために、多くの教職員や学生たちが様々な工夫をしてきました。その結果、改善された点が多分にあったことは疑いありませんが、まだそれが行き届かないところがあることも、今回の調査結果から垣間見えたように思います。

新型コロナウイルス感染症の影響は、多かれ少なかれまだ続くものと思われます。2年生が大学生活の後半の二年間をどう過ごすのか、2年生だけでなく1年生、3年生、4年生、さらに来年度以降に入学する学生たちに大学生活をどう送ってもらうのかといったことを考えていくために、今回の調査が活かされることを願ってやみません。

なお、今年度の本調査の回答者は1200人でした。過去10年間で最少だったのが2016年度の1974人でしたので、極めて少なかったと言えます。2019年度にそれまでの10000人の学生を無作為に抽出して葉書で依頼するというやり方を、全ての学生にメールを配信して依頼するというやり方に変更してから、回答者は増加傾向にあり、2295人(2018年度)、2574人(2019年度)、3685人(2020年度)と増えてきました。とりわけ昨年度については、オンライン授業化などの激変もあり、回答者数が最高を記録しました。しかし、同じく通常とは異なる状況に置かれている今年度は回答者が最低レベルまで激減してしまいました。実はこのような現象は他大学からも報告されています。その原因は、オンラインによる「お知らせ」が激増したために、一つ一つの「お知らせ」が埋もれてしまっており、さらに学生の側にも「慣れ」が出てきちんと「お知らせ」を確認しなくなったからだと考えられており、依頼を葉書に戻したという大学もありました。オンライン化の進展が逆にオンラインによる情報伝達を阻害するという皮肉な現象が起こっているようです。今後、これをいかに解決し、回答者を増やしていくのかという、大きな課題が残ることになりました。

最後に、本調査の分析については、市ヶ谷副学生センター長の高橋慎先生(経営学部)にお願いしました。分析の詳細につきましては、高橋先生による「調査結果に関する報告」をお読みいただければと思います。

2021年12月
学生センター長 齋藤 勝